ては既に前に Gauthiot 氏の說を紹介したりしが、尙次に述ぶべき同氏の說を併せ考ふれば、其の動かす可らざるものなるを知り得べく、Radloff 氏の所論は、要するに此の頃獨佛の後進學者の屢〻試みたる駁論に對して、自己の立場を支へんとし、別に理由を示さずして回鶻碑にソグド文を記せる文字を以て回鶻文字と斷定し、之を出發點として故意に此等の學者の說ける極めて自然なるソグド文字の發展に關する說を破壞せんとしたるものなるべきこと殆ど掩ふ可らず、而して之が爲に、回鶻の漠北に在りし時代に既に基督敎が其の間に行はれたるものとする、何等證跡の存せざる事實をも認めざる可らざる苦境に陷れるものなりとす、されば此の後[45] Gauthiot 氏が Radloff 氏の此の考を以て甚だ信ず可らざる意見なりとし、一顧を與へざりしは怪しむに足らざる所なりとす。

[46] Gauthiot 氏は全く Müller 氏の見解に贊し、ソグド字は回鶻字より更に發達せる蒙古字・滿洲字とは勿論、維納の Kudatku Bilik の寫本に見ゆる後世の草體の回鶻字とも甚だ異れども、然も中央亞細亞より發見せらるゝトルコ語の文記に用ゐらるゝ明亮なる楷體の回鶻字とは甚だ近く、其の相違は、ソグド字が比較的古き性質を有せる點にありとし、更に[47]

或る回鶻字、卽ち遲きソグド字は少しく古き時代に於る對應のソグド字が、習慣上形を壞し、草體と成れるものに止る、卽ちソグド字の āleph は常に明らかに nūn と相異れるに、回鶻字にては a と n は相混じ、只だ最初に來る時に、都合好くば區別し得るに過ぎず。[48] ソグド字の β は回鶻字の v に當るものなるが、回鶻字にては y との混合を避けて字形を短縮し、且つ開きたる形となれり。[49] m は回鶻字にては平かなる形となり、終に來る時の外は決して圓き形を有せず、然も終に來る時に於ては閉息せらる。[50] s と š とはソグド字にては甚だ明亮に區別せら